

平成 22 年 3 月 20 日現在

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2007～2009

課題番号：19320079

研究課題名（和文） 英語入門期におけるリタラシー教育導入に関する研究

研究課題名（英文） A Study on the Introduction of Literacy at the Beginning Level of English Education in Japan

研究代表者

大井 恭子 (OI KYOKO)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：70176816

研究成果の概要（和文）：本研究はこれまで消極的にしか取り扱われてこなかった「小学校における英語リタラシー教育」を推進しようという目的を持って遂行された。リタラシー獲得のためには音韻認識能力とアルファベット知識が必須なのであるが、これらの涵養のためには書き取りという *productive* な力の有効性が確かめられた。東アジア諸国の小学校を視察した結果、どの国でも小学校段階からリタラシー教育に真剣に取り組んでおり、日本における英語入門期でのリタラシー教育推進の必要性が浮き彫りにされた。

研究成果の概要（英文）：This study was conducted in order to promote English literacy education at the elementary school level, which hitherto has been neglected in Japan. Phonological awareness and alphabetical knowledge are necessary components in order to achieve literacy. Our study revealed that writing practice to master the alphabet and spelling is effective for attaining literacy. Through observing English classes at elementary schools in East Asian countries, we realized the importance of promoting literacy at elementary school level in Japan.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	5,200,000	1,560,000	6,760,000

研究分野：人文学

科研費の分科：言語学・細目：外国語教育

キーワード：リタラシー、小学校英語、英語入門期

1. 研究開始当初の背景

2002 年度より小学校における英語活動が「総合的な学習の時間」の「国際理解教育」の一端として始められて以来、多くの小学校で英語活動が盛んに行われている。「英語ノート」という副読本も作られ、いよいよ 2009 年度からは小学校 5, 6 年において「外国語活動」という名称ではあるが、週一時間必修という形で、本格的に小学校において英語が教えられ始めることになった。

これまでなされてきた小学校における英語教育の実態は歌やゲーム活動が主なものであり、「読み」「書き」というリタラシーにつながる教育はいわばタブーとされてきた。しかしながら英語活動を導入した学校のうち 1, 2 年生で 20%弱、3, 4 年生で 28~32%、5, 6 年生で 39~42%の学校がすでに「文字にふれる活動」を導入している（「小学校英語活動実施状況調査結果概要」文部科学省平成 17 年 3 月）。一方で、それらの試みは、いわばタブーの領域の中で、頼るべき指針やガイドライン、また確立した指導方法がなく、手探りで指導を行っているというのが実態である。

2. 研究の目的

本研究はこれまで消極的にしか取り扱われてこなかった「小学校における英語リタラシー教育」を推進しようというものである。

具体的には、以下の点を明らかにすることを研究の目的とした。

(1) 英語と書字体系が異なる日本語を母語と

する日本人学習者が英語の文字を習得していく過程を科学的に解明する。

(2) 日本人学習者の入門期におけるアルファベット学習の現状と困難点を精査する。

(3) 外国語としての英語学習に取り組んでいる諸外国の小学校のリテラシープログラムを分析し（教材分析、授業分析を含む）、日本の環境に応用可能なものを学ぶ。

(4) 子どもの語彙（書き文字）の発達を探る。

(5) 日本の小学校における英語リタラシー教育のガイドライン及び体系的シラバスを策定する。

3. 研究の方法

上記それぞれの目的に沿って次のような研究方法をとった。

(1) 音韻認識能力、語彙知識、アルファベット知識を測るテストを開発し、小学校生および中学生を対象に調査した。

さらに、概念と語彙の認知機構の変化をさぐるために mismatch 法によるプログラムを開発し、中学生を対象に、概念を示すイメージ、語彙としてひらがな、漢字、英語のいずれかで書かれた単語文字とをパソコンディスプレイに同時に表示し、イメージの意味と単語文字の意味の一致、不一致を判断するまでの反応時間を測定した。

(2) 中学校 1 年生を対象に、「書くこと」に特化した独自に開発した「スタートライン・チェック」(6 月) と「到達度調査」(2 月) を実施した。

英語入門期にリタラシー教育に関し、独特

の教授法で成果を上げている研究者・実践者を招聘し、科研セミナーを開き、公に公開した。

(3)台湾、中国、韓国を訪問し、小学校における授業を参観するとともに、教員・研究者とリタラシー教育を中心に討議した。また、現地で使われている教科書、教材を入手した。また、韓国、台湾、アメリカの研究者を招聘して国際セミナーを開催した。全国から多くの研究者、学生が集まり好評であった。

(4)文科省によって作成された『英語ノート』の語彙分析をし、中高の教科書の語彙と比較した。

(5)研究者の所属する大学の附属小学校においてリタラシー教育を主眼とする授業を実践し、教材を開発し、その効果を検証した。

4. 研究成果

研究目的別の成果は次のとおりである。

(1)①小学校5-6年生を対象にした調査では、アルファベット知識と音韻認識能力は語彙のスペル知識と有意の相関があることがわかった。文字認識という receptive な力より、書き取りという productive な力が語彙の音韻認識に影響していることが確認された。

②音韻認識能力は小学校6年生で大きく発達することが確かめられた。

③アルファベット知識に関しては中学校に上がると一挙に伸びることがわかった。

④中学校1-3年生を対象にした mismatch 法による検査の結果、1-2年生は漢字、ひらがなに比べ英語の反応時間が有意に遅いが、3年生では英語の反応時間が漢字、ひらがなと同程度になっていた。この反応時間の促進は Kroll & Stewart (1994) の「改訂階層モデル」を裏付ける結果となった。すなわち、第二言語学習の初期においては、第二言語と母語との結びつきが形成され、熟達度が高くなるに

つれて第二言語と概念の直接的な結びつきが徐々にできてくることが確かめられた。

(2) ①中学1年生の1学期においてはアルファベットを正しく綴ることに困難をもっている生徒がいる。わずか26文字であってもアルファベットを正しく4線に書くことは中1にとってハードルが高い作業であることが確認された。

②意識調査から、小学校英語から中学校英語への隔絶の大きさが読み取れた。それは主に、読み書き、すなわちリタラシー教育に関する部分の小中の違いに起因する。小学校においてもリタラシー教育を入れて行くことで、この隔絶が少しは埋まって行くのではないかと考えられる。

③単語のつづりテストの誤りから「ローマ字読み」の影響が多くみられた。それによる撥音への悪影響も考えられる。もっと英語の音が耳から入って行くことが望まれる。

④中1最後の到達度調査の結果から、並び替えによる語順を問う問題において、wh-疑問文の構文がしっかりと学ばれていないことが確認された。

⑤意識調査の結果から、「英語の文を書くことが楽しい」というように「書くこと」を肯定的にとらえている生徒は英語能力テストの得点も高かった。

(3)台湾、中国、韓国それぞれの国では英語教育の要をリタラシー教育にしていることが確認された。日本の小学校の現状と比べると比較にならないほど、この3国での小学校における英語教育は「英語教育」として進んでおり、このままの状態であると日本の小学校における英語教育は東アジアにおいてはもっとも遅れてしまうことが懸念される。

(4) 『英語ノート』の語彙には、「生物」、「飲食物」、「娯楽・スポーツ・ゲーム」に関する語彙が多く、生活語彙の補充に有効であることがわかった。語彙の視点から見て、小学校外国語活動がコミュニケーション力の素地の育成に寄与するであろうことが確認された。しかしながら、英語母語話者の言語習得の観点から見た調査では、中学校と小学校で扱われる語彙は学年レベルにおいて逆転現象が見られ、今後は到達目標を設定したうえで「小中高をとおした一貫性のある語彙指導」を構想する必要がある。

(5) 小学校5年生から公立小学校で文字指導を始める場合に適合するカリキュラムを作成し附属小学校で実践した。その成果は次のとおりである。

①アルファベット大文字小文字を正確に認識し、書けるようになった。

②文字と音との関連に気づく音韻認識力を向上させた。

③単語のスペル認識が高まった。

④口頭で覚えた文を音読する活動から、音と単語をあわせる能力を向上させた。

したがって今回実施した授業で、児童は期待していたリタラシー能力を獲得したと言え、それは量的な測定からも示唆された。

今回の研究を通して、小学生を対象とした週1回の授業であっても、児童に適したリタラシー指導法をとれば、彼らの力を十分に向上させることができると確信を得ることができたことは大きな成果だと考える。こうした考え方が広く受け入れられ、日本においても小学生に対するリタラシー教育が発展することが期待される。

以上の成果をまとめた冊子体の報告書を作成した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

①青柳祐子、杉田克生、大井恭子、アレン玉井光江、川名隆行、下山一郎 (2010) 「中学生の第一言語と第二言語における語彙—概念リンクの発達」、『千葉大学人文社会科学研究所』(査読なし)、第20号 (印刷中)。

②中條清美、西垣知佳子 (2010) 「小学校『英語ノート』の語彙分析」『英語コーパス研究』英語コーパス学会 (査読有)、第17号、115-126。

③Sugita K, Suzuki N, Oi K, Allen-Tamai M, Sugita K, Shimoyama I. (2010). Cross-Sectional Analysis for Matching Words to Concepts in Japanese and English Language. *International Medical Journal* (査読有), 17(1), 41-45.

④大井恭子 (2009) 「データから見る英語学習入門期における書く力—独自到達度テストの結果分析」、『千葉大学教育学部研究紀要』(査読なし)、第57巻、31-42

⑤鈴木夏海、杉田克生、大井恭子、アレン玉井光江、川名隆行、下山一郎 (2009). 「中学生におけることばの概念と第1言語、第2言語の認知機構に関する縦断的分析」、『千葉大学人文社会科学研究所』(査読なし)、第18号、129-140

⑥Sugita K, Hatakeyama R, Narahashi S, Sugita K, Shimoyama I. (2008). “Meaning and meaningless Hiragana” and “Arabic numeral” phonological reaction time in children of Italian-Japanese bilinguals. *International Medical Journal* (査読有), 15(3), 189-192.

〔学会発表〕（計5件）

- ① アレン玉井、大井恭子(2009) 「小学生を対象にしたアルファベット学習の意義について」 JASTEC(児童英語教育学会) 第30回全国大会、2009年6月21日、大阪商科大学
- ② アレン玉井光江、大井恭子(2008). 「初期英語教育におけるリタラシー教育—音韻能力、アルファベット知識、単語認識の関連を探る」 小学校英語教育学会全国大会 2008年7月20日、福島県福島市
- ③ 杉田克生、杉田記代子、藤井克則 (2008) 「ひらがな、ローマ字読字におけるDual Route Cascaded Model妥当性の検討」 日本小児神経学会 2008年5月29日、米子コンベンションセンター（米子市）
- ④ アレン玉井光江(2007) 「公立小学生におけるリタラシー指導の実践について」 第8回日本認知言語学会全国大会 2007年9月22日、成蹊大学（東京）
- ⑤ 大井恭子・田畑光義・入野悠己(2007) 「データから見る中学一年終了段階におけるライティング力」 関東甲信越英語教育学会 2007年8月17日、千葉商科大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大井 恭子(OI KYOKO)
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号：70176816

(2) 研究分担者

アレン玉井 光江 (ALLEN-TAMAI MITSUE)
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号：50188413
杉田 克生(SUGITA KATSUO)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：40211304

西垣 知佳子(NISHIGAKI CHIKAKO)

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：70265354